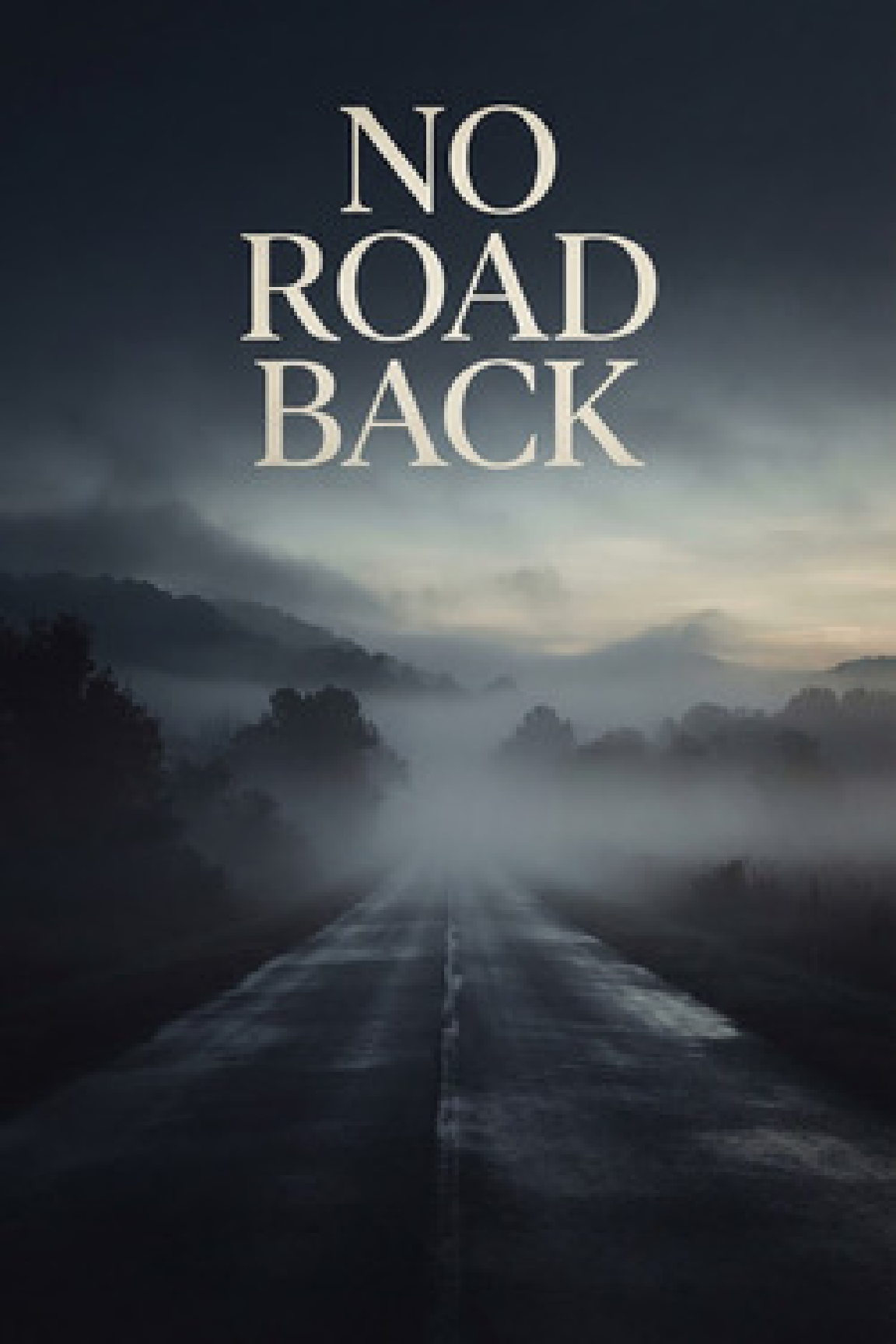

NO
ROAD
BACK

第二部

敷居 4

帰り道はない

出発から始まる旅がある。

そして、喪失から始まる旅がある。

これは後者に属する。

長いあいだ、帰還とは地理の問題だと信じていた。

ある場所を離れる。

距離を越える。

出発点に戻る。

単純な定義だった。

都合のいい。

そして間違ってもいた。

年月とともに、目に見えるどんな場所にも通じない帰還があると知った。

たどり着くべき場所がもう存在しないからだ。

あるいは、一度も存在しなかったからだ。

あるいは、私たちが変わりすぎて、それと見分けられないからだ。

それでも、帰りたいという欲求は残る。

それは人間の最も深い郷愁のひとつだ。

物事がもっと単純に見えたころへ帰りたいと願う。

もっと明快で。

もっと秩序だっていたころへ。

失った人々のもとへ帰りたいと願う。

逃した機会へ。

下さなかった決断へ。

人生がまだあらゆる可能性に開かれて見えた瞬間へ。

だが時間は何も返さない。

それは時間の仕事ではない。

時間は変容させる。

決して返しはしない。

不可能な帰還を追いかけた年月があった。

気づかないままそうしていた。

以前の自分を取り戻そうとしていた。

若者だった自分。

職業人だった自分。

息子だった自分。

自分がどこへ向かっているか知っていると確信していた男。

どの試みも同じ終わり方をした。

失望で。

その人間はもう存在しなかったからだ。

そしてそれでよかったのだ。

ある朝、過去への眼差しを変えるひとつのことを理解した。

本当に戻りたかったわけではない。

取り戻したかったのは、ひとつの感覚だった。

確かさ。

親しみ。

問いが答えより少なく見えた世界の姿。

だが人生は時間旅行を差し出さない。

差し出すのは変容だけだ。

そのとき、帰還を別の目で見始めた。

かつての自分へ向かう動きとしてではなく。

今の自分への接近として。

その違いは途方もなく大きい。

後戻りしようとするとき、私たちは時間と戦っている。

前へ進むことを受け入れたとき、ようやく時間を理解し始める。

多くの人が、家を探して生涯を過ごす。

それが場所だと思っている。

都市だと。

通りだと。

国だと。

やがて、家とは魂のありようだと知る日が来る。

そして、どんな地理座標もそれを保証できないと。

生涯で多くの国を渡ってきた。

多くの文化を。

多くの言語を。

そのたびに何かを残してきた。

そのたびに別の何かを拾い上げた。

気づかぬうちに、私は経験の生きた保管庫になりつつあった。

異なる場所から成るモザイクに。

ある時点で、こう自問するのをやめた。

「私はどこに属しているのか」

そしてこう自問し始めた。

「私は何を携えているのか」

二つ目の問いのほうがずっと役に立った。

帰属は変わるからだ。

国境は変わる。

地図は変わる。

だが内に携えたものは、旅を続ける。

方向を見失う感覚がいつもより強い夜が、いくつかあったのを覚えている。

すべてが遠く見える夜。

人々が。

場所が。

確かさが。

自分自身さえも。

そんな瞬間には、最も古い誘惑が浮かび上がった。

後戻りすること。

取り消すこと。

元に戻すこと。

以前の地点からやり直すこと。

だがそのたびに、現実は同じ真実を見せた。

以前の地点など存在しない。

存在するのは現在の地点だけだ。

そして、それをどうするかという選択だけだ。

時とともに、過去を目的地ではなく図書館と見なすことを学んだ。

訪れるための場所。

住むための場所ではない。

過去に生きる者は、少しずつ現在に住むことをやめていくからだ。

そして現在なくして未来はない。

愛した人々。

通り過ぎた街々。

逃した機会。

成功。

敗北。

すべては存在し続けていた。

だが、別の形で。

すでに書かれた頁のように。

読み返すための頁。

書き直すための頁ではない。

それは解放だった。

取り戻せないものを探すことを、ついにやめたからだ。

そして、まだ築けるものに力を注ぎ始めた。

逆説的だが、過去が私を苛むのをやめたのは、まさにその瞬間だった。

過去を目的地として扱うのをやめたときだった。

人々についても似たことが起こった。

多くの人が私の人生から去っていた。

ある者は選択によって。

ある者は必要に迫られて。

またある者は、ただ時間の営みによって。

はじめは、その不在を喪失と解釈していた。

やがて、ある存在は別の仕方で在り続けていると分かった。

残された教えの中に。

記憶の中に。

振る舞いの中に。

私に影響を与え続ける決断の中に。

これもまた帰還だった。

人そのものの帰還ではない。

その意味の帰還だ。

おそらく成熟とは、まさにこういうことなのだ。

何ものも元の形では戻らないと理解すること。

だが、ほとんどすべては新しい形で生き続けられると。

結局、帰り道を探すのをやめた。

どんな地図も示したことのないことを理解したからだ。

私はどこかへ帰っていたのではなかった。

到着しつつあったのだ。

あらゆる出発、あらゆる喪失、あらゆる出会い、あらゆる変容によって築かれた自分自身へと、到着しつつあった。

そしてそのとき、逆説は解けた。

何年も探し求めた帰還は、過去へ通じてはいなかった。

私自身へ通じていた。

だから、どこでもない場所からの帰還と語るのは正確なのだ。

目的地が存在しなかったからではない。

目的地に住所がなかったからだ。

それは地理を持たない場所だった。

国境もなく。

座標もなく。

生涯ずっと通り抜けながら、それと気づかずにいた場所。

どこでもない場所からの帰還。

今の自分への帰還。